

辰蓮昌寺にありといへども、往古は蓮昌寺の檀下にて無之、改葬の墓所のよし傳承す。故に宗榮の碑石にも無之、合葬の内にも有之哉。傳承未詳。歴代は、宗榮より七代の孫今の梅村十太夫迄代々相續、知行四拾石給はり、附人に而罷在處、當主家先々代寺西故丸左衛門秀一より、同苗故七兵衛を以預り所望故、玄蕃・左近右衛門承知之上、文化九年七月寺西氏に被呼出、知行六拾石給はり相勤候。右梅村宗榮由來暨子孫之傳言如此与云々。

五月十三日

梅村十太夫 記之

按するに、梅村宗榮は、小堀氏日記に、妻も先年相果、只今獨身にて、荒町に家相求居申。と見ゆ、享保十六年九月言上書にも、尤一家等も無之、獨身にて相果、竹田掃部方へも内々にて承合候へども、様子相知不申。と記載すれば、其の一族津田氏の家人と成りて連綿せしといふも甚だ不審なり。宗榮が事は前顯に載せたる如く、可觀小説或は飛耳操録等に記載すといへども、皆世人の妄説にして證とするに足らず。

○木、新保町

元和二年横山山城守家士竹田金右衛門武功書に、山田八右衛所に在之刻、木、新保町に成敗者取籠居候を討取りたるよし記載す。又正保四年開禪寺書付に、最前は木、新保町に御屋敷拜領仕罷在。とあり。今厩町をば木、新保一番丁となし、夫れより白鬚前をば六番丁とす。

○木、新保來歴

木、新保は、此の地邊の惣名にて、荒町より木、新保と呼びて、其の地域甚だ廣く、荒町・厩町・糸倉町・須田町・竹町・白鬚前等の數町を建てたり。按するに、此の町共、往古は何れの村地ならんか。或は往昔木、新保村といへる村落ありて、其の村地なりといへれど、木、新保村は石浦庄七ヶ村の一村にて、石浦神社に傳來せる慶長十一年石浦七ヶ村氏子連判狀に、はせの御觀音様其の後木、新保村の内に御座候。などと記載し、其の村落は明和二年の慈光院書付に、石浦郷七ヶ村の内木、新保村は、西町・横堤町邊に有之處、其後倉月郷へ轉地す。今の木、新保是也。と見ゆ、安江八幡社記にも、木、新保は昔は上堤町邊に有之處、上安江村轉地の後、今の地へ移轉す。とありて、往昔は今云ふ上堤町

邊より横堤町・西町邊へかけ村落ありしかど、舊藩國初の頃、金澤市中を取廣められしに付、安江村などと同じく、村落をば轉地を命ぜられて、舊村地は悉く町地と成りしが、其の後移轉したる村地もまた追々町地と成り、是今いふ木、新保の町地なり。さて其の村落も遂に絶えたりしといへり。按するに、木、新保の村落は早く絶えたりけん。舊藩郷庄分村名帳に、倉月庄に其の名を記載せず。

○木、新保町怪談

續咄隨筆に云ふ。寛保二年五月廿三日の事なりしに、安江木町能登屋喜右衛門俳名文川なる者、道具商賣をなし渡世しけるが、碁をよく打ちける故、此方彼方と打ちてあるきけるに、堀川久昌寺の方丈も碁を好まれける故、此の日暮頃より喜右衛門参り、殊に其の夜は快晴にて、涼風に餘念もなく丑滿つ頃まで打ちけるに、喜右衛門仕合能からず。夜も更ければ、明日またまからんといふに、今夜更に及んで歸らんも心元なし。下男に見送らせんと和尙云ひけれども、人を勞する事をいたみ、常に行かふ道何か苦しかるべき。明けなば又こそ参らめ。其の時は今宵の仕返しも致

さんなど戯れて、門前に出でけるが、月もはや西にかたぶき、いと物すごきに、只一人歩みながらも、先程の手は斯くこそ打つべきものを、扱々残念なる事仕つる物哉など、獨言に、うか／＼として來りけるに、向うを見れば、若き女の姿にて、十間許先へ立ちて行きけり。何方より出でしや、殊に深更に及んで、若き女のたゞ獨り大膽成事哉とおもひ、能く／＼見るに、何とやらん眼より下はおぼろ／＼として見えず。是は不思議也と少し足早に歩むに、此の女歩むともなく、只向う十間程先にあり。暫く止りて見るに、女も止るやうに見ゆ、歩めばゆき、止れば行かず。不思議ながら荒町の中程に來りしに、木、新保町へ入る四辻の角に辻番の小屋あり。其の前にてかき消えて見えず成りけり。怪敷思ひ、走り行き見るに、番人寝ぼけ聲にて、やれ恐しやといふまゝ、小屋の戸を押あけ、眞裸にて飛出でけり。何事成哉と尋ねれば、番人ふるひ／＼、さては夢にて有りけるかや。今若き女の幽靈來り飛付きけるゆゑ、振拂ひて懸出候也。定めて内に居るにやあらん。改めてたべといふにぞ、をかしくは思ひしかども、小屋の内を見るに、